



「おにぎり石の伝説」(五年)

戸森しるこ

何の変哲もないものがなぜかブームになり、みんなが夢中になって集めてしまう。誰もそのような経験をしたことがあるのではないだろうか。「おにぎり石の伝説」では、クラスで突如起きたブームがきっかけで始まる騒動を描いています。作者の戸森さんに、この作品に込めた思いを教えてくださいました。



Profile

1984年 埼玉県生まれ。作家。『ぼくたちのリアル』で第56回講談社児童文学新人賞を受賞し、デビュー。主な著書に『ゆかいな床井くん』『十一月のマーブル』(以上講談社)など。

「おにぎり石」の始まり

小学生の頃に、近所の子どもたちの間で、三角の石が流行したことがありました。どこでどのように手に入れたのかは覚えていませんが、いつのまにかみんなが持っていて……。そう、「おにぎり石」は実在したのです。

流行りものに疎いわたしも、その石を確か二つほど持っていて、お気に入りのお菓子の箱に入れて大切にしていました。何度も取り出して触っていたので、触り心地もよく覚えています。魅力的にすべすべでした。

小学生の教科書に物語を書くことに決まり、そんな三角の石のことをふと思い出しました。そういうことがあったなと、懐かしい気持ちになりました。そういった小さな記憶のかけらが、物語を書く時には大変役に立ちます。実物をもう一度見たいと思い、執筆期間中に実家へ帰ったタイミングで探してみたのですが、当時の宝物は残念ながら見つからず。残しておけばよかったなあと、がっかりしたのでした。

石のことをあれこれ考えているうちに、同じクラスのKくんのことをわたしは思い出しました。明るくて絵が上手で、みんなから親しまれていたKくん。石とセットで思い出したのは、Kくんがあの石をたくさん持っている場面をぼんやり覚えているからです。人気者だから石をたくさん持っていたのか、たたく石を持っていたから人気者になったのか、それとも、人気者のKくんが持っていたからこそ、あの石は価値のあるものになったのか。たとえば彼の家の庭に、あの石が大量に転がっていたら、ちよつとおもしろいかも知れない。

現在のマイブームである「よもぎ蒸し」の最中に、にやにやしながらそんなことを



「この石、なんだかおにぎりみたい。」その一言がきっかけで、空前のおにぎり石ブームは始まった。

考えているうち、この物語は完成しました。

人間関係への向き合い方

ところで作中では、おにぎり石が原因でクラスにちよつとした上下関係が生まれ、微妙な雰囲気になっていきます。十年ほど前になるかと思いますが、「スクールカースト」という言葉を知った時に、なるほどと思いました。確かに学校という場所には、見えないけれど厳しい上下関係があったような気がします。今よりも経験不足で純粋で繊細だった分、傷つけられたことも傷つけたこともたくさんありました。例えばSNSのコメント欄を覗いてみれば分かることですが、大人

が暴言や差別やいじめを一向にやめられないのですから、子どもたちにそれをやめましようと思えるのも難しい話ではないでしょうか。大人になれば、嫌いな人や苦手な人とは、うまいこと距離を置くことができる自由が得られます。子どもの頃は、同じクラスにいれば避けることが難しく、「嫌いだから避けました」なんて言えばきつと問題になってしまふ。大人ができていないこと、つまり「全員で仲良し」というかなりハードルの高い目標を子どもたちに強要するなんて、わたしにはちよつと無理です。ですから、やめましよう、というお話を書くのはあまり好きではなくて、彼らなりの解決方法の部分を、物語の中心にしてみようと思いました。

現実には物語のようにはうまくいかないことを、書き手はよく知っています。その上で、ユーモアのある世界を楽しんでもらえたらいいなと思います。国語の時間のちよつとした息抜きに、おにぎり石をどうぞです。



おにぎり石のゲームを終わらせるには、強力なパワーアイテムが必要だった。ぼくたちのおにぎり石伝説は終了した。

編集部より

この教材では「人物の心情の変化を想像して音読すること」「言葉の力」として設定しています。人物の行動や会話から読み取った心情の変化をふまえながら音読します。

物語を読む子どもたちの教室には、「おにぎり石」のように集めたくなるものや、流行しているものはあるでしょうか。登場人物の気持ちを想像しながら、物語の世界を楽しんでいただけたらと思います。



どんな気持ちを表現するのかを考えて音読してほしいな。



「さなぎたちの教室」(六年)

安東みきえ

「さなぎたちの教室」の主人公・谷さんは、いっしょに生き物係をすることになった松田君や、持久走の練習でペアを組む高月さんと関わりの中で、自分の心の葛藤に向き合います。作者の安東さんに、この作品に込めた思いを教えてくださいました。



Profile

山梨県甲府市生まれ。作家。2018年、『満月の娘たち』で第56回野間児童文芸賞受賞。2022年、『夜叉神川』(以上講談社)で第62回日本児童文学者協会賞受賞。主な著書に『星につたえて』など。

柔らかな鏡

目の中に異物が飛び込んでくることがある。痛いので目薬などで除くのだが、たまにそのゴミが痛みもなく、まばたきのたびに移動するのが見えることがある。そんな時、目の表面に涙の膜があることに気づかされる。涙の膜はまぶたと眼球とのあいだ、自分の内側と外側とを隔てる境界域にゆるりと張られているのだろう。

もしかしたらそれは、薄く透明な膜となって全身を覆ってはくれないだろうか。柔らかな鏡となつて外界から守ってはくれないだろうか。たとえばさなぎの殻のように。

そんなふうに想像をしたのがこの作品のはじまりだった。そして人にもさなぎの時代があるのではないかと思った。あるとしたら中学生になる少し前、小学校後半の頃だろう、と。

もう一度戻りたいですか

「もう一度、子どもの頃に戻りたいですか？」という質問をされたことがある。思わず「いいえ」と答えた。小学校の教室の、あの椅子



クラス替えがあった。何人かの友達ができた。けれど、ときどきすうすうと寒いような心持ちになる。



「目の玉ってさ——。」走りながら、わたしは言った。
「水のまくにくるまれてるんだよね。」

にまた座ってみろと言われてたようで、尻込みをしてみたのだ。

小学生の私が教室の椅子に座って考えていたのは、ここに居ない人になりたいたい、という思いだった。天狗の褌でも透明マントでもいい、誰からも自分の姿が見えなくなる覆いが欲しいと願っていたのだ。

授業がいやだったのだから、人間関係に弱っていた。もしもその当時しんどいという言葉を知っていたら、息を吐くように始終つぶやいていたと思う。

私は転校生だった。山の麓の小さな学校から、市街の中心にある大きな学校に移っていた。うまく順応できず、以前の学校を思い出してばかりいた。それまで川でザリガニ釣りに興じていたのが、瀟洒な友人宅でのバービー人形遊びに放り込まれたのだ。遊びにも級友にもなじみず、つまらないと態度に出すことも少なくなかった。

環境が変われば遊び方も違ってくる。つきあい方のルールも違う。それが理解できなかった。次第にひとりでの時間が増えていったが、ひとりでも平気なフリをしていた。そのうち、級友どころか大人からも「変わった子」と言われるようになってしまった。その頃を思い出

すと、胸がぎゅつと縮むような気がしてくる。

やり直せるなら

あの頃の自分はどうすればよかったのか、今ならわかる。人はそれぞれ違うということに気づけばよかったのだ。つまらないと決めてかかった自分は傲慢だった。もっと新しい友人に近づこうとすればよかった。数少ないとはいえ、友だちと心が通いあった瞬間もあり、その時に味わった嬉しき、幸福感は今でも忘れられないのだから。

「もう一度、子どもの頃に戻りたいですか？」と、もし再び訊ねられたら「はい」と答えよう。自分を変えてやり直してみたい。世界を知る喜びに溢れ、きらきらと輝くような黄金の年代を、できるならあの時の級友たちと生き直してみたいのである。

編集部より

この教材では、「表現に着目して朗読する」ことを「言葉の力」として設定しています。情景描写と登場人物の心情を重ねながら、教材を読み取る力、読み取ったことを豊かに表現していく力を培ってほしいと考えました。

「さなぎたちの教室」という題名にどんな意味が込められているか考えることで、子どもたちが今の自分自身を見つめ直すきっかけにもなる教材です。



春を感じる表現がたくさんあるね。



「模型のまち」(六年)

なかざわ しょうこ
中澤 晶子

日本で戦争や原爆を体験した人は年々少なくなり、多くの人は過去のことで想像するしかありません。「模型のまち」の主人公・亮にとっても、原爆は「自分には関係のない」「遠い昔」のことでした。作者の中澤さんに、この作品に込めた思いを教えてくださいました。



Profile

1953年名古屋生まれ。子どもの本作家。1991年、『ジグソーステーション』で第29回野間児童文芸新人賞を受賞。『ワタシゴト 14歳のひろしま』(以上汐文社)、『ひろしまの満月』(小峰書店)など。日本児童文学者協会会員。

まちの過去と現在

物語の舞台となった広島は、デルタのまちです。市内を流れる川は六本。真水と海水がせめぎ合う汽水域には、魚たちが群れを成し、潮の香が漂います。一二〇万都市の川とは思えない、豊かな水の流れです。

このまちが人類初の核攻撃を受けた日から、およそ八〇年。いまでは、どんなに目を凝らしても、川の水面を埋め尽くしたという死者たちの姿を、思い浮かべることはできません。様々な慰霊碑に刻まれた亡き人々の無言の声は、いまを生きる私たちに、届いているのでしょうか。

被爆者の平均年齢は、八四歳を超えました。修学旅行で広島を訪れる子どもたちに向け、命を削るように語りかける被爆証言者の姿も、年々減ってきて



原爆ドーム(写真は全て中澤さん撮影)

をつなぐ」という努力は、「繰り返さない責任」の、根幹を支えるものではないでしょうか。そのためには、まず知ること。知って、考えること。それを自然体で子どもたちに受け入れてもらうために、どのような方法があるのでしょうか。

体験と体感

体験者から伝えられた記憶を、私たちが継承しようとするとき、「様々な表現を通して」というルートが思い浮かびます。例えば、演劇、朗読、音楽、舞踏、美術制作などがそれにあたります。いずれも、身体を使つての表現です。声を出す。手を動かして物を作る。頭の中で考えるだけではなく、身体を通して「体感」する。それは、もしかすると、新しい「体験」なのかもしれません。

この作品の中で、亮は真由とともに、失われたまちの模型づくりに励みます。身体を使つてまちを再現することで、亮の心の奥底に潜んでいた、想像力のスイッチがオンになった、と私は思っています。

亮は八〇年前に生きた、かつちゃんと出会い、短い生の時間を共にします。ビー玉遊びに興じる亮は、その時代とまちを「体感」し、新しい「体験」をしたのではないのでしょうか。



広島平和記念資料館(原爆資料館)下の発掘調査現場(2016年)

広島に生きた人々の、一人一人の「物語」。それらを私たちは、どう語り継いでいけばよいのか。戦争の日々から遠く離れた今日の子どもたちに、いかにして。それが、この作品を書く上での「困難な課題」でした。

記憶をつなぐということ

私は、この物語の主人公・亮と同じく、転校生として広島のまちに降り立ちました。被爆二〇周年の広島は、まだ川岸にバラックが立ち並び、平和公園の木々も、いまほど鬱蒼^{うっそう}としてはいませんでした。中学の友人たちは、被爆二世が多く、彼ら彼女ら、その家族を通して、私は広島というまちの根底を揺るがしたものの正体を感じていました。

もとより先の戦争を体験していない私たちに、戦争についての直接的な責任はありません。しかしながら、「同じことを二度と繰り返さない責任」は、私たちにも等しくあると思っています。体験の「記憶」も二〇一六年に、広島で原爆資料館の耐震工事が行われ、その際、資料館の下から、あの日に破壊された、まちの遺構が姿を現しました。人々が、確かにここに暮らしていた証となる品々も数多く出土し、その中には、当時の子どもたちが遊んだはずのビー玉もありました。これらのビー玉を見たことが、この物語を書く遠因になったと私は思っています。

子どもたちが物語を通して、戦争の記憶を自分の日常に少しでも引きつけて考えることができますように。そしてそれが、世の中の動きに目を凝らすきっかけとなれば、これほどうれしいことはありません。



発掘調査で出土したガラス瓶など

編集部より

この教材では「表現の効果をとらえる」ことを「言葉の力」として設定しています。繰り返し出てくる表現や情景描写と、人物の心情を結びつけて考えることで、表現の効果をとらえる教材です。主人公である亮の姿は、子どもたちにとって受け止められるでしょうか。子どもたちの心の中で生まれた変化を大切にしながら、読み味わっていただけたらうれしく思います。



自分の心に残る表現
を見つけてほしいな。



「カミツキガメは悪者か」(三年)

皆さんは「カミツキガメ」と聞いて、どんな生き物を思い浮かべるでしょうか。防除の対象となる外来種として有名なカミツキガメ。水棲生物のカメラマンである松沢陽士さんは、自分の家の近くにカミツキガメがいることを知り、撮影を始めます。カミツキガメとの撮影の日々を、松沢さんに教えていただきました。

身近にいたカミツキガメ

私がカミツキガメの撮影を本格的に始めたのは、二〇一四年のことです。自宅から車で五分くらいのもとも近い場所にいることを知り、通うようになりました。それ以前から、印旛沼や流入河川でカミツキガメが繁殖していることは、ニュース番組などで見て知っていました。しかし、まさか自宅近くの水田にまでいるとは思っていませんでした。こんなに身近な場所にもいるものなのかと驚いたものです。そしてさらに驚いたのは、その数の多さです。水田や周辺の浅い水路、そしてため池にも、行けば必ず見つかるくらいカミツキガメがいるのです。大きさもまちまちで、背甲長が三十センチ以上ある大きなものから、前年生まれの赤ちゃん亀までいます。同じような場所にはクサガメもよく見られますが、それよりも明らかに数が多いのです。とくにこの教材にも出てくる小さなため池は、カミツキガメにとつて暮らしやすいようでした。水深が二十センチ程度ととても浅いため、カミツキガメが日光浴のために明るいうちに出ていけば、その姿はまる見えで、多い日には一度に数匹が、池の中心付近に出ていました。

貴重な生態シーンをわずか半年で

池に通い始めてからひと月ほどした頃には交尾の様子を撮影することができました。野生の姿の写真だけでも珍しいと思っていたところに、このような貴重な生態シーンが撮れてしまったわけです。こうなると、もつと他の生態、例えば餌を食べている様子や産卵の様子なども撮りたいと思い始め、だんだんと欲が出てきました。ただ、交尾のように偶然撮れた写真と違って、捕食や産卵を狙って撮るとなると、とたんに難しくなりました。なぜならその頃の私は、カミツキガメの生態について知らないことばかりだったからです。まずは専門書を読んで生態について調べ、同時にカミツキガメの防除を行っている研究者にも話を聞きました。産卵期はいつか？ どのような場所に産卵するのか？ 何を食べているのか？ カミツキガメに関する知識をかたっぱしから取り入れました。そしてカミツキガメが出そうな場所を昼も夜も歩き回りました。その甲斐あって、カミツキガメがアメリカザリガニを食べている様子や、産卵の瞬間を撮ることができました。最終的には孵化まで撮影することができ、思いつく範囲の撮りたいシーンはわずか半年で撮影することができました。たったそれだけの期間でここまで撮れるとは私自身全く思っていなかったので、正直驚きましたが、その理由は何と言つてもたかさんのカミツキガメがいたからでしょう。それを思うと複雑な気分でした。

生き物を飼う責任

現在は、撮影に通っていた水田周辺でカミツキガメを見つけることは難しくなっています。千葉県が行っている防除の成果が現れて

カミツキガメの意外な姿

当時はカミツキガメの写真をインターネットや図鑑で探してみると、捕まえたものを地面に置いて撮られたものばかりでした。自然の中で暮らす野生の姿は全くといっていいくらいありません。これまでも撮影していなかったカミツキガメの野生の姿。最初はそれを撮れたのが嬉しくてたまりませんでした。観察していて意外だったのは、とても警戒心が強い生き物ということでした。ため池に近づくと、物音がしないように静かに歩いてはいたものの、カミツキガメはすぐに私の存在を察知して、岸のえぐれの下に一目散に逃げ込んでしまうのです。それからというもの、私はできる限りゆつくりと、木々の陰に隠れながら池に近づくようにしました。カメラを構えたり撮影位置を変えたりするのは、カミツキガメが顔を水に沈めたときに行い、水面から顔が出ているときに動かすのは、シャッターボタンを押す人差し指だけです。それはまるで、カミツキガメと「だるまさんがころんだ」をしているようでした。

いるのだと思います。カミツキガメは迫力のあるとても魅力的な亀ですが、やはり日本にはいけない生き物です。捕まえられたカミツキガメは最終的に冷凍して処分されます。可愛そうだなと思いますが、だからといって防除の手を緩めるわけにもいきません。そのような生き物を増やさないためにも、生き物を飼うときには責任を持って最後まで面倒を見る、そして野外には絶対に逃がさないということを広く知ってもらいたいと思っています。



捕まえられたカミツキガメ



まつざわ しょうじ
松沢陽士

Profile

1969年生まれ。カメラマン。日本の淡水魚を中心に、水中に暮らす生物を撮影している。『小学館の図鑑NEO [新版] 魚』などの写真を担当するほか、著書に『カミツキガメはわるいやつ？』(フレーベル館)など。

編集部より

この教材は、三年生の説明文のうち、最後の「自分の考えを広げ、深める」系統に位置づいています。ポリユームのある文章ですが、これまでの学習を生かして要点を押さえることで、筆者の伝えたいことが浮かび上がってきます。

その名の通り凶暴なイメージのある「カミツキガメ」。教材文で描かれた姿から、子どもたちは、どんな考えを深めていけるでしょうか。

ペットを飼っている子どもたちもいると思うけど、考えさせられる教材だね。





「インターネットは冒険だ」(五年)

ふじしろ ひろゆき
藤代裕之

情報化がますます進む社会において、子どもたちの周りにはさまざまな情報があふれています。学習のみならず、ふだんの生活の中でも活用するインターネット。そんなインターネット空間を「冒険」していくために必要なことは？ 筆者の藤代裕之さんに、改めてこの教材の意義を教えてくださいました。



Profile

1973年生まれ。法政大学社会学部メディア社会学科教授・ジャーナリスト。著書に『ネットメディア覇権戦争 偽ニュースはなぜ生まれたか』(光文社)、編著に『フェイクニュースの生態系』(青弓社)など。

インターネットは私たちの生活にはなくてはならない存在だ。学校ではGIGAスクール構想によりインフラが急速に整備され、授業でネットを利用することも多くなっている。しかし、その利用に当たってただ心構えを説いたり、危険性を呼びかけたりするだけでは実態にそぐわないのは明らかだ。この教材「インターネットは冒険だ」では、ネットを使いこなすことを前提に、最低限学べきスキルと、子どもたちに立ち止まり考えてもらう工夫を取り入れた。

誰もが発信者になる時代に

新しいアプリを使いこなし、ユーチューバーが人気職業になるほどネットが身近にある子どもたちのほうが、多くの大人よりもネットに詳しい状況にある中、教科書でネット利用を考えるとテーマはなかなか扱いが難しいことが想像される。

そこで、教材文として、ある子どもがフェイクニュースの当事者として巻き込まれていくというストーリーが挿入される展開を採用した。自分のふとした発言が知らぬ間にネットに広がってしまう。まさ

か自分の発言が……と思うも、周りの友達もその情報を信じてしまうという筋立てだ。

これを読んだ子どもたちから「そんなことあるわけない」という反応があってもいい。マスメディアとソーシャルメディアの最大の違いは、誰もが発信者であることだが、自分や友達といった身近な人が発信者であるという自覚は驚くほど乏しい。まず、その認識を持つってもらうことがスタートラインとなる。

ネット情報の三つの仕組み

次に、気軽に触れているネット情報の伝わり方には仕組みがあるというところを理解してもらうために、「シェア(共有)」「お金儲け」「アログリズム」という三つの仕組みを紹介している。

ボタン一つでスマートフォンから情報をシェアできる仕組みと、悪意だけでなく善意や心配からでもシェアしてしまう人の心理を知ること、台風や地震などの災害時に間違った情報が広がりやすい要因を理解できるだろう。

また、お金儲けのために情報を広げている人たちがいることを知るのも大切だ。ユーチューバーが過激な行動で注目を集めることもあるが、これはアテンション・エコノミーと呼ばれているものだ。情報の正しさよりも面白さや過激さが収入につながるネットの仕組みを利用したもので、フェイクニュース拡散の要因でもある。

シェアや、コンピュータが一人一人に最適な情報を選ぶアルゴリズムの説明では、危険性だけでなく、その仕組みが便利さや快適さも提供していることに触れた。良い、悪いではなく、これらの仕組みを知ったうえで、ネットをどのように使うのかを考えてもらいたい。

注意してほしいのは、リテラシーを必要以上に強調していないことだ。リテラシーはフェイクニュース対策の切り札のように言われているが、個人のスキルで偽・誤を見抜くことは困難だ。ロシアのウクライナ侵攻でゼレンスキー大統領に似せたAIの偽動画が広がったように、ネットは各国による情報戦の舞台となっている。もはや専門家以外に手に負えるものではない。

学習を広げる

この教材を読んで子どもたちに考えてほしいことは何か。それは、情報の出所がどこなのか、ネットを駆け巡る中で異なるものになっていないか、どのように自分や友達に関わっているのかという、情報やニュースの生態系の構造理解と関わりだ。教材に示した三つの仕組みを理解し、このことを考えられるようになれば冒険の準備は整う。これは食べ物で考えると分かりやすい。誰が作っているのか、売り場の管理は適切か。それがはつきりと分からないような食べ物を口にした

り、友達に食べさせたりしないはずだ。

出所は、ニュースであれば情報源が書かれているかを確認するとよい。ネットを使った調べ学習では、検索して出たサイトを記載するだけでなく、情報源を確認するようにすると学びを生かすことができる。情報の伝わり方の仕組みは、シェアは伝言ゲームで、お金儲けについては、ユーチューバーチームによる発信合戦をすることで楽しく学ぶこともできる。そのような関連学習が行えるような、ツールやワークショップも考えてみたい。

冒険を応援するために

教材タイトルにある「冒険」という言葉は、危険性はあるが、知的な好奇心を満たしてくれるというネットの現実を表している。子どもたちの冒険に大人がずっと付き添うことはできない。本教材が、子どもたちの冒険を応援する出発点になることを願っている。

編集部より

この教材は、五年生で出会う初めの説明的文章になります。四つの系統のうち、「読解の基礎」に位置づき、「要旨をとらえる」力を身につけることを目指します。

説明文の読解の基本を押さえつつも、現代の子どもたちにとって避けては通れない「情報リテラシー」について考えることもできる教材。さまざまな学習展開の可能性を探っていただければ幸いです。

この教材で書かれていることは、大人にとっても大切なことだね。



「永遠のごみ」プラスチック(六年)

保坂直紀

わたしたちの生活になくはならないプラスチック。しかし、そのプラスチックがもたらす問題が大きくなっています。単純に解決できるわけではない複雑さはらむ「プラスチックごみ」問題。この教材を通して子どもたちに考えてほしいことを、筆者の保坂直紀さんに教えていただきました。



Profile

1959年生まれ。東京大学大学院特任教授。サイエンライター。気象予報士。著書に『海洋プラスチック 永遠のごみの行方』(角川新書)、『クジラのおなかからプラスチック』(旬報社)ほか。

情緒に流されることのないように

ウミガメの鼻に刺さったプラスチックストローを引き抜く動画が、二〇一五年ごろからネット上で広まりました。この衝撃映像が、いま海洋にプラスチックごみ問題が発生していることを社会に印象づけたことは確かでしょう。

このままでは、廃棄された漁網にウミガメやカニが絡まり、海鳥の胃袋はプラスチック片でいっぱいになってしまう。プラスチックは困りものだ。プラスチックを生活から一掃し、プラなし生活を目指そう――。

その気持ちはわかるのですが、はたしてそれでよいのでしょうか。とかく情緒に流されがちな環境問題を考えるとき、わたしが大切にしていることがあります。それは、「事実」と「バランス」です。

海洋のプラスチックごみ問題では、多くの科学者が研究を進めています。「こういう方法でこの対象を調べた」ことを明らかにし、その手順を踏めば誰がやってもそうなる客観的な結論を導く「科学」は、未知の領域にわたしたちが踏み込む際の「事実」を提供してくれます。

子ども向けの文章の執筆には、大人向けとは違う難しさがあります。各論を併記して、判断は読者にお任せしますという書き方では、おそらく子どもたちは消化しきれない。子どもの成長段階に合わせた結論を書いておきたい。それは、微妙なニュアンスを泣く泣く削る作業でもあります。

思考力を育てる踏み台になりたい

最近、飲食店でプラスチックストローを紙ストローに替える動きがあります。一方で、「紙ストローはプラスチックストローより地球の環境に悪い」という研究論文もいくつか発表されています。原料の製造から運搬、製品化して使用、廃棄までをトータルで計算すると、地球温暖化や海洋の酸性化を進める二酸化炭素の排出、製造過程で使う薬剤による環境汚染などを総合的にみした場合、プラスチックストローは紙ストローよりはるかに環境に優しいというのです。

海にごみとして漂うプラスチックストローを減らしたいなら紙ストローを使えばよいし、地球環境の悪化を防ぎたいなら、紙よりプラスチックのほうがまし。さあ、どうしますか。本来ならそう問いかけるべきかもしれませんが、この教材ではその部分は割愛し、プラスチックのリサイクルを進め、ごみの総量を減らす行動を呼びかけました。

もし可能なら、そうしたさまざまな見方があることにも、授業で触れてほしいと思います。子どもたちが成長して振り返ったとき、「あの国語の教材には、こういう見方が足りなかったな」と批判してくれればうれしい。そういう強靱な思考力を育てる踏み台になることができれば本望です。

「市民」になるために

さらに言うなら、「こうしたやっかいな問題は、君たちが自分事とし

て考え、社会を舵取りして解決していかなければならないのだよ」というメッセージも子どもたちに伝えたいところです。教材では十分に触れることはできませんでしたが、「この地球に住む私たち一人一人が」「大人も子どももみんな考え、行動に移しましょう」という言葉に、その願いを込めました。自分が社会を構成する大切な一員であることを自覚する「シチズン(市民)」になってほしいということです。

小学校や中学校でこのテーマについて講演すると、子どもたちが意外なほど深く理解してくれることに驚きます。そもそも、プラスチックはきわめて有用な人類の発明品で、これなしで社会はうまく機能しないでしょう。なくせばすむという単純な問題ではありません。これが、さきほど述べた「バランス」です。

わたしたちは、これからプラスチックとどう付き合っていくのか。この教材が、子どもたちがこうした社会問題を考えていく契機になることを、切に願っています。



海岸に打ち上げられるプラスチック

編集部より

この教材は、六年生の説明的文章になります。四つの系統のうち、「情報活用」に位置づけるものであり、系統の仕上げとして「複数の情報を関係づける」力に迫ります。一つの文章を読むだけでは、この力を十分に身につけることはできません。この教材では本文テキストに加えて、プラスチックごみに関連する二つの資料を掲載。資料とテキストを往還的に解釈することで、「実の場」で生きる読解力を育てます。



単純に解決できない問題だからこそ、みんな考えなければならぬんだね。